

思考力・判断力・表現力等を向上させながら、考えをまとめることができる生徒の育成
 —パフォーマンス課題を設定した社会科授業実践を通して—

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
 伊藤 徳洋

I 研究主題の設定と経緯、背景等

1 社会科における今日的な課題から

「社会科は暗記教科である」というイメージをもつ人は多く存在するだろう。実際に、社会科の授業で獲得した知識や技能を活用する場面がテストに占める割合が多い。学習指導要領の第1章総説2社会科改訂の趣旨及び要点に示されている社会科が抱える課題には「主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である」、「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が必要である」と示されており、現状の「覚えること」に重きをおいた授業では、こうした課題は解決できないと考える。

そこで、新学習指導要領で言われている「主体的・対話的で深い学び」を実現するための方向性として、課題解決学習を取り入れた授業や生徒が獲得した知識や技能を生かす場を設定した授業を展開することで、生徒の思考力・判断力・表現力等を向上させられると考える。

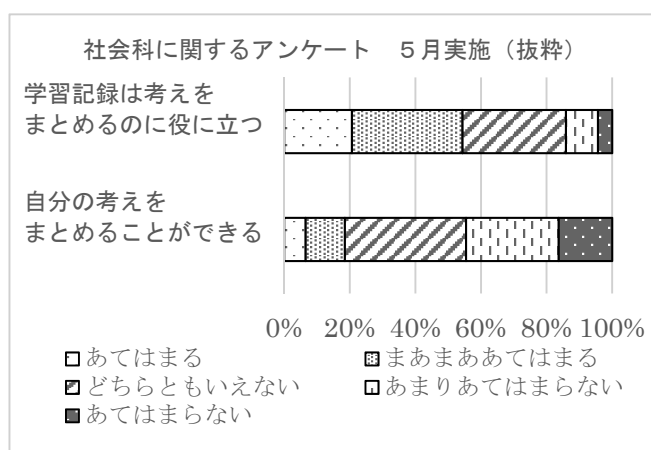
2 新学習指導要領の動向

新学習指導要領では、「何を理解しているか・できるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」だけでなく、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会にどう生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」という、具体的な生活場面での活用や社会との関わりを意識して学力を捉えている。原田(2018)は、生徒が主体的に取り組むためには、探究すべき課題(問い)にリアリティや切実性がなければならない。課題の切実性と方法の科学性を踏まえた探究によって「真正の学習」が生まれる(下線著者)としている。さらに、新学習指導要領では、「社会的な見方・考え方」を働かせた思考力・判断力・表現力等の育成については、単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定し、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする学習を充実させることが求められている。

3 本校の実態

本研究は、本校中学1年1クラス、31名(男子18名、女子13名)の生徒を対象として実践と検証を行うことにした。

生徒の実態を把握するために、5月に質問紙による調査を実施した。質問紙の内容は、これまでの社会科教育の研究実践で取り上げられていたアンケート項目を元に質問事項を設定した。この結果から、本校の生徒は社会科の学習への意欲は高い傾向にあり、社会科の学習には肯定的な意見が多いが、社会科は暗記教科としてとらえている生徒が多いことや、自分の考えをまとめることを苦手とする生徒が多いことが分かった(資料1)。理由としては、「テストは暗記すればできる」や「何をまとめればよいか分からない」という否定的な意見が目立った。こうした姿から、自分が獲得した知識を使って、課題を解決する力が必要であり、学習指導要領で述べられている課題が、本校の生徒にもあてはまることが分かった。



【資料1 社会科に関するアンケート結果の抜粋】

4 研究主題設定

本校の生徒と社会科における今日的な課題より、本研究では、これまで「覚えることが重視されている授業」をしてきた自分自身の授業を、与えられた課題に対して学習した知識や技能をどのように活用し、どのように表現するかを考えさせる「教えて考えさせる授業」へと転換していくことが必要であると考え。そして、これまで「まとめさせるだけ」だった単元のまとめを、生徒自身が日常生活で同じような場面に出くわすようなリアリティのある課題を設定し、これまでに学習してきた知識や技能をどう使い、どう表現するかを考える課題につくりかえる。こうすることで、生徒自身に切実性をもたせることができ、学習で獲得した知識や技能を働かせ、思考力・判断力・表現力等を高めさせることができるのではないかと考え、さらには、自分の考えをまとめることができる生徒を育成することにつながるのではないかと考え、本研究の主題に設定した。

II 研究の理論

1 「逆向き設計」論

「逆向き設計」論は、G. ウィギンズとJ. マクタイによる共同著書『理解をもたらすカリキュラム設計 (Understanding by Design)』(ASCD, 1998/2005)で提案されているカリキュラム設計論である。「逆向き」とは、教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計することと、評価方法を先に構想することを意味している。西岡(2008)では、「逆向き設計」論の特徴は、単元計画を行う際、また年間計画や教育課程全体の設計を行う際に、「求められている結果(目標)」「承認できる証拠(評価方法)」「学習経験と指導(授業の進め方)」の三つを三位一体のものとして考える点にあるとしている。「逆向き設計」論の考え方をを用いて、単元構想を作る際には、生徒にどのような知識や技能を身に付けさせたいかについて、「知の構造」を作り、明確にする必要がある。「知の構造」では、単元を通して獲得させたい基本的な知識や技能を「事実に知識」と「個別的スキル」としている。そして、単元を通して身に付けた知識や技能を概念化し、他の学習においても転移可能となった知識や技能を「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」に位置づけるとしており、これらを活用して単元を通して目指す生徒の姿を「原理と一般化」に示している。単元のまとめでは、獲得した知識や技能を活用する場として、パフォーマンス課題を設定する。パフォーマンス課題は、リアルな文脈の中で知識やスキルを使いこなすことを求める内容にすることが求められている。

2 先行実践研究

パフォーマンス課題に関する先行研究では、宮田・奥村(2017)は、中学校社会科地理において、過疎過密地域のいずれかを選択し、人口問題や地域が抱える課題の解決策を記述させる実践を報告している。生徒のまとめた解決策が抽象的に記述されているものが多いことから、必要な知識や技能を習得させるだけでなく、概念の抽象化につながる可能性を述べている。また、生徒が授業で扱わなかった事例を挙げたことから、事例の豊富化までをもちあわせることができる可能性があることも述べている。さらに、限られた時間の中で思考力・判断力・表現力の評価までをできることから、パフォーマンス課題を取り入れることは有効であると述べている。しかし、課題としては、学習した事柄同士を関連付けるための主発問や授業のまとめ方を工夫することであると述べている。

上田・山口・石川(2017)は、中学校社会科歴史において、パーツ組み立て型による知識や技能を身に付けさせる単元を構成し、社会科カードを使って相関図をつくらせる実践を報告している。この実践では、生徒自身が、知識や技能を活用する必要性を感じることができたとしている。さらに、パフォーマンス課題を解決す

る際には、協同学習でお互いの考えを表現したり、共有したりすることを手立てとして取り入れている。対話的な学びを通して、協同でパフォーマンス課題を解決する良さについても述べられている。

原田(2018)は、生徒が主体的に取り組むためには、探究すべき課題(問い)にリアリティや切実性がなければならず、課題の切実性と方法の科学性を踏まえた探究によって「真正の学習」が生まれるとしている。

以上のことから、これまでの先行実践研究でも「逆向き設計」論によるパフォーマンス課題を設定した実践が、生徒の考えをまとめさせることに対して有効であることが実証されている。宮田らが課題として述べている、主発問や授業のまとめ方を解決できる手立てを考慮し、研究実践を考えていくこととする。

III 研究の内容と方法

1 研究の目的

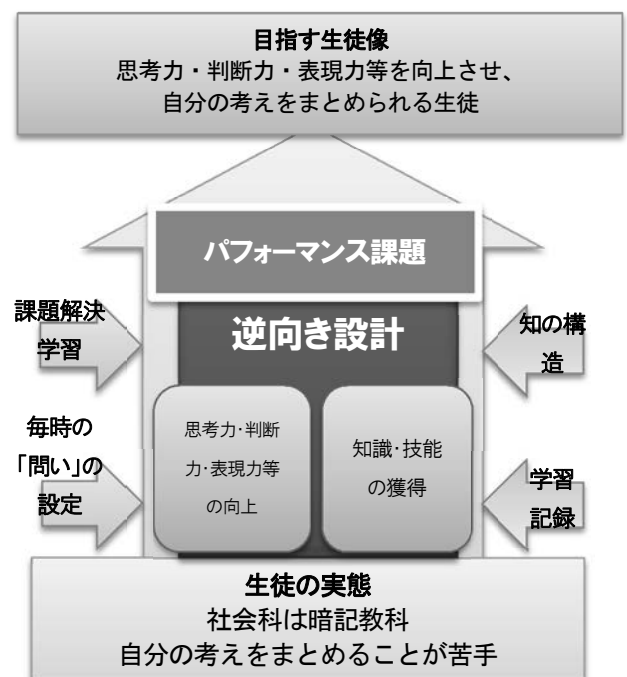
社会科が暗記教科であるという認識が強いのは、学習して獲得した知識や技能を生きて働かせられていないからである。そこで、「逆向き設計」論を用いてパフォーマンス課題に取り組みせることで、獲得した知識や技能をどのように活用するかを考え、自分自身の思考力・判断力・表現力等を向上させることができ、自分の考えをまとめることができるようになることを検証する。

2 目指す子ども像

獲得した知識や技能を生きた知識として活用し、学習した内容と設定された課題を関連付けることで、自分自身の考えをまとめられる生徒

3 実践研究の構想

目指す生徒像の実現に向けて、以下の研究構想を元に実践を進めていく(資料2)。



【資料2 研究構想図】

4 手立てについて

(1) パフォーマンス課題の設定

① 「知の構造」を作る

単元の学習を始める際に、「知の構造」を作り単元内で獲得させたい知識や技能を明確にする。「知の構造」における「事实的知識」と「個別的スキル」は知っておく価値があるもの、つまり、授業で獲得する知識である。「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」は、「事实的知識」と「個別的スキル」を活用することで作り上げられ、重要な知識とスキルになる。そして、「原理と一般化」に示されている内容が、パフォーマンス課題で表現させたい生徒の姿になり、生徒が同じような課題に出会ったとき、活用できる内容を意識して設定する。

② ミニパフォーマンス（学習記録）の「問い」の設定

毎時の学習のまとめとして、「学習記録」と名付けたミニパフォーマンスを設定して取り組ませる。ミニパフォーマンスとは、大きな課題であるパフォーマンス課題にいきなり取り組むことは難しいと考えられるため、パフォーマンス課題に向かう小さな課題として位置付けたものである。ミニパフォーマンス（学習記録）の「問い」には、1時間の学習で獲得した知識や技能を使うことでまとめられる内容を設定し、ミニパフォーマンスの積み重ねることでパフォーマンス課題につながるように手立てとして取り入れる。ここでの「問い」は教師から提示するため、本実践での学習を課題解決学習とする。

③ パフォーマンス課題の設定

単元のまとめにおいて、授業で獲得してきた知識や技能を活用するパフォーマンス課題を設定する。パフォーマンス課題では、「問い」にリアリティをもたせるために、生徒が日常で出あうかもしれない場面を設定することで、生きた知識として活用することができるものとする。また、ミニパフォーマンスを活用する課題にすることで、どの学力層の生徒でも取り組むことができるような「問い」を設定する。

④ 評価について

ルーブリックを作成し、取り組んだパフォーマンス課題が、その課題で設定された評価に対してどこまで到達できたかで判断する。ここでのルーブリックは、西岡(2008)の「予備的ルーブリック」を参考に、各単元でルーブリックを作成する。作成するルーブリックの基本形を以下のようにする。

評価	まとめ方
A	記述が簡潔で、自分の考えを踏まえた説明になっている。また、設定された課題について、学習した内容を踏まえた内容が記述されている。
B	学習記録を基に記述されている。
C	Bに満たないもの

【資料3 作成したルーブリック】

(2) 学習調整をさせるための「学習のあしあと」

2学期実践（単元名：アジア州）において、「学習のあしあと」と名前を付けた振り返りを毎時間書かせる。ここでは、知識及び技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかを判断する。

5 検証計画

(1) ミニパフォーマンス（学習記録）の記述

毎時のまとめとして設定する「問い」に対する記述は、それぞれの授業で獲得した知識や技能を用いた記述になっているかを分析する。ここでの知識や技能とは、「知の構造」の転移可能な概念までに獲得されたものをいうこととする。

(2) パフォーマンス課題の記述

ミニパフォーマンスに取り組ませていることから、ただそれを書き写すだけの取り組みにならないように、評価基準の視点を以下のように設定した。

ア 毎時間のミニパフォーマンスを活用はしているが、丸写しではなく、自分の考えをふまえた記述になっているかという視点。

イ 設定された課題についての記述がなされているかどうかという視点。

以上の2点を満たすものをA評価としたルーブリックを作成し、評価することとする。

(3) 「学習のあしあと」の記述

「学習のあしあと」では、一枚のワークシートに単元の時間数分の枠を設け、枠内を上下に二分した。

上段には、その日に学んだことや初めて知ったことをまとめ、下段には、授業の中で自分にはなかった視点の振り返りや、次時の学習への目標を書かせ、各自の学習の振り返りをまとめさせた。これら2つの記述から、知識、技能の獲得や思考力・判断力・表現力等の向上に関わる生徒の状況や考えを分析する。

IV 1年次公民分野における研究実践

1 研究の目的

1年次の実践では、逆向き設計でパフォーマンス課題を取り入れた単元のつくり方を整理することと、逆向き設計でのパフォーマンス課題が、目指す生徒像に迫る有効な手立てであるかどうかを検証するために、中学3年生を対象としてプレ実践を行った。

2 研究の対象

清須市立A中学校3年生2クラス76名（男子43名、女子33名）を対象に、以下の単元で実践を行うことにした。

単元 第4章私たちの暮らしと経済

3節 価格の動きと金融（6時間完了）

3 対象生徒の実態

対象生徒の実態は、社会科の学習に対する意欲は高

く、積極的に授業に取り組むことができる。しかし、社会科を暗記科目だと思っている生徒が多いことや、自分の意見をまとめることを苦手としている。

4 授業の実際

本実践では、毎時の「問い」を以下のように設定し、ミニパフォーマンスである「学習記録」をまとめさせた(資料4)。

時間	毎時の「問い」
第1時	市場経済において、価格はどのように決まるのだろうか。
第2時	市場経済において、価格はどのような役割をはたしているのだろうか。
第3時	貨幣や金融は、わたしたちの社会でどのような役割を果たしているのだろうか。
第4時	銀行や日本銀行は、どのような仕事をしているのだろうか。
第5時	景気の変動の際に、日本銀行はどのような金融政策をとるのだろうか。

【資料4 毎時の「問い」】

そして、第6時には、以下のようなパフォーマンス課題を設定し取り組ませた。

<p>「日本の経済新聞づくり」 現在の日本が「好況」と仮定して、今後「好況」「不況」になりうることをふまえて、どちらかを選択し、 ア 価格はどうなるか イ 金融に与える影響 ウ 日本銀行の金融政策 を取り入れて記事にまとめなさい。</p>

【資料5 設定したパフォーマンス課題】

5 1年次実践の成果と課題

本実践の一つの目的であった、逆向き設計でパフォーマンス課題を取り入れた単元を作ることで、生徒にどのような知識や技能を身に付けさせなければいけないかを明確にすることができると分かった。また、毎時のミニパフォーマンスを活用してパフォーマンス課題に取り組むことができた生徒がほとんどであり、ミニパフォーマンスを設定することの有効性も分かった。また、課題としては、毎時に設定した「問い」がパフォーマンス課題につながるように設定していくことと、パフォーマンス課題も毎時の「問い」に関連付けられるようにしなくてはならないということが見いだされた。成果としてのミニパフォーマンスと、課題としての「問い」の設定を2年次の実践につなげることとした。

V 2年次の検証実践1

1 本単元における目的

1年次実践の成果であったミニパフォーマンスの活用と、課題であった、毎時の学習で獲得した知識や技能が活用できる「問い」を吟味した単元構想を基にした実践を行うことを目的とした。

2 研究の対象

清須市立A中学校第1年生1クラス31名(男子1

8名、女子13名)

単元 第1編世界のさまざまな地域

第2章世界各地の人々の生活と環境

3 単元構想

(1) 知の構造

本単元では、第1時から第6時にかけて、雨温図の読み取りを通して、各気候帯の特色をとらえ、それぞれの気候帯で生活する人々のくらしの工夫を考える授業展開を考えた。そして、単元を通して獲得させたい知識や技能を以下の「知の構造」に示し、実践することにした(資料6)。

	事实的知識	個別的スキル	
知っておく価値がある	自然の特徴 語句の意味 国名	雨温図の読み取り 写真資料の読み取り 方・見方	筆記テストや実技テストによって評価が可能
	転移可能な概念	複雑なプロセス	
重要な知識・スキル	人々の営み 過去と現在	地域の環境条件 人々の営みが生み出す 地域的特色 仮説をたてること 多面的(地理的)な見 方	パフォーマンス課題による評価が必要
	原理と一般化		
永続的理解	地球の様々な地域で暮らす人々は、その土地の気候に合わせて、住む家、着る服、食べるものを考えた生活をしている。暮らしの工夫は、長い年月をかけて多くの人が積み上げてきたものが、現在も受け継がれている。		

【資料6 本単元における知の構造】

(2) 毎時の「問い」

1年次実践と同様に、パフォーマンス課題に至るまでに、ミニパフォーマンス(学習記録)の活動を取り入れた。また、1年次実践の課題であった、毎時の「問い」がパフォーマンス課題につながるような「問い」を設定した。そして、毎時の「問い」が、パフォーマンス課題に取り組む際に有効な手立てとなりうるかどうかを検証することにした。

第7時に単元のまとめとしてのパフォーマンス課題に取り組ませ、第8時で取り組んだパフォーマンス課題を振り返り、吟味する時間を設定した。振り返り・吟味では、課題に対する自分の記述と、学級内の仲間の記述を比較させ、自分の課題に不足している視点や参考になるまとめ方から学んだことを付け足しさせることで、自分自身のパフォーマンス課題を吟味させようと考えた。

以下に記したものが、本単元の毎時の「問い」である(資料7)。

時間	内容	毎時の「問い」
第1時	雪と氷の中で暮らす人々	一年の大半が雪と氷でおおわれている所で、人々はどのような生活をしているのだろうか。

第2時	寒暖差が激しい土地に暮らす人々	冬の気温が世界一低くなるといわれるシベリアで、人々はどのような生活をしているのだろうか。
第3時	温暖な土地に暮らす人々	温暖な気候の日本とイタリアの人々の生活は、どのようにちがうのだろうか。
第4時	乾燥した土地に暮らす人々	雨が少なく乾燥した所で、人々はどのように生活しているのだろうか。
第5時	常夏の島で暮らす人々	熱帯で暮らす人々の生活は、どのような生活をしているのだろうか。
第6時	標高の高い土地に暮らす人々	標高が高い所で、人々はどのように暮らしているのでしょうか。
第7時	パフォーマンス課題	
第8時	パフォーマンス課題振り返り・吟味	

【資料7 本単元における毎時の「問い」】

(3) パフォーマンス課題の設定

本校の生徒は、小学4年生時に総合的な学習の時間で国際理解の学習をしていることから、以下に示したような課題を設定することで、実際に自分たちが行ってきた学習と、社会科での学習がつながるようにした(資料8)。また、世界地図にまとめることは、その後の「世界の諸地域の学習」にも関わるため、つながりをもたせることを意識した課題づくりを心がけた。

小学校4年生に世界の気候について紹介することになりました。世界のそれぞれの地域で暮らす人々の生活や地域的な特色を、小学校4年生に分かるように、世界地図に紹介する内容を文章で書きましょう。そして、最後に自分が一番印象に残った気候帯についてまとめましょう。

【資料8 設定したパフォーマンス課題】

4 抽出生徒

本研究を進めるにあたって、思考力・判断力・表現力等に関わる学力に差がある2名の生徒を抽出することとした。生徒Aの学力はA評価に、生徒Bの学力はB評価に当てはまる。そして、この2名のミニパフォーマンスである学習記録、パフォーマンス課題の記述の変化から、思考力・判断力・表現力等の高まりを検証し、どの学力層の生徒に対しても本実践が効果的であったかどうかを検証していくこととした。

5 授業の取り組みの様子

(1) 生徒Aの単元内の学び

① パフォーマンス課題の記述

生徒Aが取り組んだパフォーマンス課題の記述を以下に示す(資料9)。

気候帯	記述内容
寒帯	記述できていない
冷帯	冷帯で一年の気温差が大きい。タイガと呼ばれる針葉樹林がある。夏はダーチャという所で過ごす人もいる。
温帯	温帯の中でも温暖湿潤気候で、四季がはっきりしている。一年の気温差が大きい。温帯の中でも、地中海性気候で夏の日差しが強く

	乾燥するが冬は一定の雨が降る。
乾燥帯	乾燥帯で遊牧する多くの民族が暮らす。オアシスという場所以外に樹木はほとんど育たない。
熱帯	熱帯の中でも雨季と乾季がはっきりしている。多雨高温のため植物がよく育つ。家は木などで作られている。
高山気候	記述できていない
印象に残った気候帯：記述できていない	
理由	記述できていない

【資料9 生徒Aのパフォーマンス課題の記述】

② パフォーマンス課題の取り組みと評価

初めてパフォーマンス課題に取り組むということもあり、設定された課題を理解して、取り組むまでに少し時間を要していた。

生徒Aのパフォーマンス課題と各気候のミニパフォーマンスと照らし合わせてみると、冷帯のまとめでは、ミニパフォーマンスに一年の気温差が大きいという記述が加えられていた。温帯のまとめには、気候区の記述が加えられたが、人々の生活に関する記述がなくなっていた。乾燥帯の記述では、ミニパフォーマンスから内容を抜粋してまとめられていた。また、各気候帯について色分けをし、視覚的に見やすくまとめられていた。しかし、寒帯、高山気候については、時間内にまとめることができず、最後の「自分の印象に残った気候帯」まで到達することもできていなかった。この結果、生徒Aが取り組んだパフォーマンス課題を、評価のルーブリックに照らし合わせると、B評価となった。

③ 考察

生徒Aが取り組んだパフォーマンス課題の評価がB評価となった理由について、評価基準ア、イの視点から考察する。

記述をすることができていた各気候のまとめについては、ミニパフォーマンスにさらに付け加えが必要だと判断した事柄を選び、記述することができていることから、評価の視点アは概ね到達している。しかしながら、まとめ方を考えることに時間を費やしてしまい、時間内に課題を終えることができなかった点から、評価の視点イには到達できておらず、B評価になった。

生徒Aのミニパフォーマンスは、どの気候帯も、「問い」に対する自分なりの考えをまとめることができていた。しかし、ミニパフォーマンスの取り組みを見ていると、課題を理解し、自分の考えをまとめていくのに少し時間がかかっているようであった。こうした姿から、生徒Aは与えられた課題を理解し、自分の言葉で表すこと時間がかかってしまうことが考えられる。今後生徒Aは、まとめ方が分かるようになることで、スムーズな取り組みに変わっていくのではないかと考える。

(2) 生徒Bの単元内の学び

① パフォーマンス課題の記述

生徒Bが取り組んだパフォーマンス課題の記述を以下に示す(資料10)。

気候帯	記述内容
寒帯	<ul style="list-style-type: none"> ・一年中雪と氷でおおわれている。 ・樹木が育たない。 ・イヌイットという人が暮らしている。 ・イグルーというかまらのような家で冬は過ごす。 ・夏は動物の皮のテント。 ・あざらしやトナカイの肉を狩りをして食べる。
冷帯	<ul style="list-style-type: none"> ・針葉樹が目立つ。 ・冬はアイスホッケーやサウナを楽しむ。 ・木の家で二重の窓でとても太い。 ・コンクリートの家が増えてきている。 ・麦で作ったパンやじゃがいもをよく食べる。 ・夏は野菜を食べる。 ・フードをかぶって出かける(冬) ・夏はうすぎ(半そで)
温帯	ローマ <ul style="list-style-type: none"> ・日本と気温はほぼ同じ。夏の降水量が少なく、冬が多い。日本より雨が少ない。 ・夏は日が沈むのが遅く、日差しが強いので、熱を伝えたいかたい石の建物。 ・ぶどう、トマト、オリーブがよく育つ。
乾燥帯	<ul style="list-style-type: none"> ・とても暑くて雨が少なく、ほとんど降らないので乾燥している。 ・樹木も育たない。 ・オアシスという所は育つ。 ・日干しレンガで作られた家。 ・肌をおおった服そう。 ・暑すぎて肌がやけどしてしまうくらい暑い! ・らくだを焼いたものや野菜の煮込み、米を食べる。
熱帯	記述できていない。
高山気候	記述できていない。
印象に残った気候帯	記述できていない。
理由	記述できていない。

【資料10 生徒Bのパフォーマンス課題の記述】

② パフォーマンス課題の取り組みと評価

生徒Aと同様に、初めはどのようにまとめればよいか戸惑いを見せていた。しかし、「ワークシートの内容や学習記録を活用しよう」という教師の働きかけのあとは、スムーズに取り組むことができていた。課題へは、毎時のミニパフォーマンスと同様に丁寧に取り組むことができていた。丁寧に進めてしまったために、学んだことをすべて書こうとしてしまい、寒帯、冷帯、温帯、乾燥帯はミニパフォーマンスの記述を写すことが多くなっていた。そのため、最後の「自分の印象に残った気候帯」まで到達することもできなかった。まとめ方は、必要だと思う点には下線が引かれていたり、色分けされていたりするなど、工夫した取り組みができていたが、ルーブリックに照らし合わせると、B評価になった。

③ 考察

生徒Bが取り組んだパフォーマンス課題の評価がB評価となった理由について、評価基準A、Iの視点から考察する。

パフォーマンス課題のまとめでは、ミニパフォーマンスの内容をほぼ丸写しになっており、下線を引くことや色付けをする工夫は見られたものの、考えの付け加えはなかった。この点から、評価の視点Aには到達できていない。さらに、時間内に課題を終えることができなかった点からも、評価の視点Iに到達できていないため、A評価にならず、B評価になった。

生徒Bは、自分の考えに自信が持てず、自分の考えを表現することも苦手としていた。第1時のミニパフォーマンスの取り組みでは、初めは何も書けずにいたが、教師から「自分の考えを文章じゃなくても、まずは書いてみよう」と働きかけをしたところ、第2時以降の取り組みでは、毎時の学習で学んだことを一つ一つ丁寧に取り上げていた。どのミニパフォーマンスも箇条書きになっていることから、事実の取り上げはできるものの、文章でまとめる力がまだ備わっていないことが分かる。今後の学習では、自分の考えを文章にまとめることができるような「問い」の設定やそのための支援をし、生徒Bの思考力・判断力・表現力等を高めていかななくてはいけないと考えた。

6 成果と課題

(1) 全体の成果と課題

ミニパフォーマンスの記述を、順をおって見ていくと、自分の考えをまとめることが苦手な生徒が、経験を重ねるごとに「問い」に対して自分の考えをまとめることができるようになった様子が見られた。生徒のまとめは、箇条書きや事実の羅列が多く見られるが、「学んだことを書く」ことを意識して取り組むことができた。また、生徒の感想からは、「文章ではまとめられなくても、何を学んだかを書こうとした」「友達の意見を参考にして、まとめてみた」などの意見が見られるなど、毎時の学習で獲得した知識や技能が活用できる「問い」の設定が、生徒自身が考えたことを書くことにつながっており、ミニパフォーマンスの設定は本実践を通して目指す生徒の育成に、有効な手立てとなり得ることが分かった。また、振り返り・吟味の時間では、友達の取り組んだパフォーマンス課題と自分のパフォーマンス課題を比較して、参考になるまとめ方をそれぞれ見つけることができた。この活動で得た視点を、次回の実践に取り入れようと考えた。

課題は、パフォーマンス課題の取り組みで、何をどのようにまとめるかを考え込んでしまう生徒が多く見られたことであった。生徒が取り組んだパフォーマンス課題の評価は、A評価3人、B評価23人、C評価5人であった(最後まで到達した生徒は5人)。この結果から、1年次実践と同様にミニパフォーマンスの

「問い」がパフォーマンス課題につながるような「問い」となるように設定し、つながりを意識した授業展開をしていくことの必要性を感じた。また、半数の生徒がこのパフォーマンス課題を最後までやり切れなかったことから、生徒の実態に応じた課題の設定をより慎重に考えて、「問い」を設定していかななくてはいけない。以上の成果と課題を踏まえて2学期実践を行うこととした。

(2) 抽出生徒の成果と課題

生徒Aの毎時の「問い」に対するミニパフォーマンスは、どの気候帯の記述も「問い」に対して自分の考えをまとめることができている。そして、パフォーマンス課題には、ミニパフォーマンスの記述に、自分の考えを付け加えて書くことができている。その姿から、生徒Aの思考力・判断力・表現力等が高まったと言えるだろう。

生徒Bは、パフォーマンス課題における各気候帯のまとめが、ほとんどミニパフォーマンスと同様であった。また、課題を最後まで終えることはできなかった。しかし、生徒Bは、自分の考えに自信が持てず、本単元の初めは自分の考えをまとめることに苦手意識をもち、手が止まりがちであったことを考えると、経験を重ねることで、自分の考えをまとめることができるようになった姿は、大きな成長であると考えられる。

こうした2名の姿から、この実践は、思考力・表現力・判断力等に差のある生徒にも有効な授業デザインであり、生徒のその資質、能力を高められたのではないかと考える。

課題は、生徒Bの姿からも分かるように、本単元で設定したパフォーマンス課題では、ミニパフォーマンスを書き写すだけで終えることができる設定であったことである。より生徒に考えさせることができるパフォーマンス課題を設定する必要がある。

VI 検証実践2

1 調査対象

検証実践1と同様の生徒を対象とする。

単元 第1編 世界のさまざまな地域

第3章 世界の諸地域

1節 アジア州

2 本単元における目的

これまでの実践の成果として表れているミニパフォーマンスである学習記録を継続的に行うことと、生徒の実態に応じたパフォーマンス課題を設定することを目的として実践を行うことにする。さらに、本実践では、各自がどのように毎時の学習の振り返りをし、それを学習に生かされているかを検証するために「学習のあしあと」を取り入れることにする。

3 単元構想

(1) 知の構造

検証実践1と同様に、本単元の学習で獲得する知識や技能を「知の構造」まとめ、学習に取り組むことと

する(資料11)。

事実に知識	個別のスキル
自然環境 人口 語句の意味 宗教 国名	グラフの見方・読み取り方 写真資料の見方・読み取り方
転移可能な概念	複雑なプロセス
アジア州の姿 アジアの経済成長 位置や場所 工業 農業 人々の営み	地球的課題 仮説をたてること 資料やグラフの読み取りを通して、地域的特色を多面的、多角的に考察する
原理と一般化	
アジア州は、中国やインドの発展だけでなく、ASEANやアジアNIESのような国や地域の連携により、近年、急速に経済成長してきた。また、異なる自然環境や文化をもつ5つの地域がそれぞれの資源を生かして成長していることも、広範なアジア州の成長の特色であることを理解することができる。ただし、成長の裏側には、地球的課題を含む様々な課題が存在することを理解することができる。	

【資料11 本単元における「知の構造」】

(2) 毎時の「問い」

本単元では、「なぜアジア州は急速に成長したのだろうか」という単元を貫く「問い」を設定し、本単元の学習を通して各国や地域がどのように発展したかを意識させることをねらいとした。また、第1時と第8時で同じ「問い」をすることで、パフォーマンス課題以外でも獲得した知識や技能を活用する場を設定した。また、毎時の「問い」が、パフォーマンス課題の取り組みに活用できるように設定した(資料12)。

時間	内容	毎時の「問い」
第1時	アジア州をながめて	なぜアジア州は急速に成長したのだろうか。(予想)
第2時	成長する東アジア①	東アジアはどのように工業化を進め、発展したのだろうか。
第3時	成長する東アジア②	中国はどのように成長したのだろうか。工業と農業の視点から考えよう。
第4時	東南アジアの発展と課題	東南アジアはどのように貿易を進め、成長したのだろうか。
第5時	南アジアで急速に成長するインド	南アジアのインドが、急速に成長した背景にはどのようなことがあるのだろうか。
第6時	西アジアや中央アジア	西アジアや中央アジアは、どのように発展したのだろうか。
第7時	パフォーマンス課題	
第8時	パフォーマンス課題振り返り・吟味	

【資料12 本単元における毎時の「問い」】

(3) パフォーマンス課題

本実践では、以下のようなパフォーマンス課題を設定した。ミニパフォーマンスである学習記録を参考に5つの地域をまとめられるように設定し、記述が丸写しにならないよう思考力・判断力・表現力等を使う

場面として、企業の誘致という場面を設定した。そして、なぜその企業を選んだかを記述させることで、授業で獲得した知識や技能を使うことになると考えた（資料13）。

アジア州では、「世界の企業の中心地」をめざして、さまざまな企業を誘致しています。そこで、あなたは、アジア企業誘致委員の一員として、アジア州をアピールすることになりました。

『アジア州の5つの地域の強みと課題』を伝えられるように、一枚の地図に分かりやすい言葉を用いて、資料を作成しなさい。さらに、以下のA～Fの業種から1つ選び、どの地域に誘致するのか、その地域の強みや課題をふまえて、判断した理由を明確に書きましよう。そして、最後にキャッチフレーズをつけなさい。

A 情報関連に関する企業
 B 機械工業に関する企業
 C 食糧に関する企業
 D 通信機器に関する企業
 E 衣料に関する企業
 F 鉱産資源に関する企業

【資料13 設定したパフォーマンス課題】

4 授業の実際

(1) 生徒Aの単元内の学び

① パフォーマンス課題の記述

生徒Aが取り組んだパフォーマンス課題の記述を以下に示す（資料14）。

地域	記述内容
東アジア	機械産業が発展し工業化が進んでおり、ハイテク製品に必要なものを作っていてアジアNIESと呼ばれる。大気汚染などの環境問題がある。
東南アジア	東南アジア諸国連合(ASEAN)とFTA(自由貿易協定)があり東南アジアの物などの行き来がスムーズにいく。他国の企業を受け入れ工業化が進んでいる。生活排水の処理の遅れなどの都市問題がある。
南アジア	IT産業が進み教育機関の整備や技術力があるが、大気汚染、水質汚染、交通渋滞などがある。
西アジア	石油がよく取れ、生活に必要なものにたくさん使われていて、OPECなどでアラブ諸国は結び付いている。国際的な不況を受けて不安定な面も見られる。
中央アジア	希少金属(レアメタル)が取れて、スマートフォンなどの材料になっている。
誘致する企業: 鉱産資源に関する企業	
理由	レアメタルは他の地域ではあまりとれないが、アジアでは取れる。しかし、標高が高く乾燥しているので整備が必要。

【資料14 生徒Aのパフォーマンス課題の記述】

② パフォーマンス課題の取り組みと評価

生徒Aのパフォーマンス課題は、強みになる点を赤

で記述し、課題になる点を青で記述するなどの工夫がみられた。また、各地域のまとめは、各地域がどのように成長したかを初めに記述し、その後に課題を記述するという構成になっていた。記述内容を見てみると、東アジアのミニパフォーマンスには課題が書かれていなかったが、パフォーマンス課題では取り上げられていた。そして、東南アジアの記述では、ミニパフォーマンスを元に、さらに分かりやすくまとめ変えていた。さらに、西アジア、中央アジアも、ミニパフォーマンスを元に詳しい記述がなされているなど、ミニパフォーマンスを元に、記述内容をより詳しくしたり、書き加えたりすることができていた。

企業誘致の記述には、西アジアに鉱産資源に関する企業を誘致することとして、中央アジアで採掘されるレアメタルに着目した記述がなされていた。課題としては、整備が必要だとして、単元で学習した内容を踏まえたまとめをすることができていた。そして、本実践では、設定されたパフォーマンス課題に最後まで取り組み、まとめることができていた。

生徒Aのパフォーマンス課題を作成したループリックに照らし合わせると、ア、イの基準を満たしており、A評価になる。

③ 考察

生徒Aが取り組んだパフォーマンス課題の評価がA評価となった理由について、評価基準ア、イの視点から考察する。

パフォーマンス課題の記述内容を見てみると、ミニパフォーマンスから、まとめる内容を自分で選択してパフォーマンス課題の記述することができていたことから、学習内容を簡潔にまとめることができていた。また、まとめに取り組む中で、どのようにまとめるかを考えて、「強み」を赤で記述し、「課題」を青で記述する姿が見られた。これらの点から、評価の視点アに到達していると判断した。さらに、企業誘致では、中央アジアを選択した理由を、「レアメタルは他の地域ではあまりとれないから」とする強みと「整備が必要だ」とする課題についても記述することができ、これまで獲得してきた知識を活用していることから、評価の視点イに到達していると判断し、この結果からA評価とした。

生徒Aが本実践のパフォーマンス課題を最後まで終えることができたことは、検証実践1の第8時で行った振り返りを生かし、「何をどのようにまとめるか」を自分なりに考えてまとめることができたといえるのではないかと考える。

また、ミニパフォーマンスへの取り組みから、学習した知識や技能をまとめる経験を積み重ねたことで、生徒Aの思考力・判断力・表現力等が高まり、自分の考えをまとめることができていたのではないかと考える。

第4時のミニパフォーマンスの記述には「都市問題もあるが」と課題となる点に言及していた。これは、第

3時の学習のあしあとに「さまざまな問題に目を向けたい」と書いており、その振り返りを第4時の学習で実践することができ、学習のあしあとが有効に働いたのではないかと推測する。

(2) 生徒Bの単元内の学び

① パフォーマンス課題の記述

生徒Bが取り組んだパフォーマンス課題で記述したもの、以下にまとめた(資料15)。

地域	記述内容
東アジア	アジアNIESのシンガポール、韓国、ホンコンは機械類の輸出が多い。
中国	中国は人口が多く、発展している。農業が盛んで生産数が多くても、自国で消費してしまうため、輸出ができない。東部は工業が発展しているが、西部は発展していないため、「西部大開発」をかかげている。 課題 経済の中心になっているが、その一方で工場から出る煙やよごれた水で環境問題になっている。
東南アジア	FTAで自国を守るために関税をなくす。時刻が強いものはたくさん作り輸出し、弱いものはもらう。 農業の近代化が進み、人々が働けなくなり都市へ。工業団地をつくる。 課題 川や鉄道の線路に沿ってスラムができていたり、人口が多いため、交通渋滞が激しくなったりしている。
南アジア	IT産業が盛ん。 インドでは、数学、哲学などの教育が盛んで、英語が準公用語。アメリカとインドは時差を利用している。そのため、海外企業の進出が活発。 課題 産業の近代化が進み、都市へ移り住む。スラムや大気汚染、水質汚染、交通渋滞など都市問題になっている。
西アジア 中央アジア	石油がよく取れる。 鉱産資源にめぐまれている。石油が中心的にあり、発展している。 他地域と比べて(ここまでで時間切れになる)
誘致する企業: 機械工業に関する企業	
理由	理由は書けなかった

【資料15 生徒Bのパフォーマンス課題の記述】

② パフォーマンス課題の取り組みと評価

生徒Bのパフォーマンス課題では、強みと課題について記述されており、色を分けて記述する工夫が見られた。さらに、強調した語句については下線を引き目立つようにまとめることができていた。

各地域の記述内容は、ミニパフォーマンスを元にしたまとめが目立った。検証実践1では、箇条書きでしかまとめることができていなかったが、本実践では、「問い」に対して自分の考えをできる限り文章でまとめることができていた。中国、東南アジアについては、ミニ

パフォーマンスの段階から課題に着目して記述することができていた。南アジアは、ミニパフォーマンスでは、課題の記述は見られなかったが、パフォーマンス課題では、南アジアの課題について記述がなされていた。西アジア、中央アジアのミニパフォーマンスでは、石油やその他の鉱産資源に恵まれていることや乾燥帯のため農業ができないことの記述があったが、パフォーマンス課題では、時間切れになってしまった。企業誘致に関しても、どの企業を誘致するかまでは選択できたが、理由までは記述することができなかった。

よって、生徒Bのパフォーマンス課題は、B評価になる。

③ 考察

生徒Bが取り組んだパフォーマンス課題の評価がB評価となった理由について、評価基準ア、イの視点から考察する。

生徒Bがまとめたパフォーマンス課題は、ミニパフォーマンスを写すだけではなく、ミニパフォーマンスから必要な事柄を選択して記述することができていた。また、生徒Aと同様に強みと課題について色を分けての記述や強調したい部分に下線を引くなどの工夫ができていたため、評価の視点のアに到達していると判断した。しかし、西アジア、中央アジアのまとめと企業誘致の記述ができていないことから、評価の視点イには到達できておらず、B評価という判断をした。

検証実践1と比較してみると、ミニパフォーマンスは、箇条書きではなく、どの地域の学習でも、文章での記述ができていた。この変化を、生徒Bにインタビューしたところ、「前(気候帯)では、何を書けばいいか分からなかったが、何度かまとめていくうちに、箇条書きで書いていたことを文章で書いてみようと思った」と答えた。この姿は、生徒Bが、1時間の学習で獲得した知識や技能をどう活用するかを実践したことを表しており、思考力・判断力・表現力等が高まり、考えをまとめることができるようになってきたととらえることができる。また、まとめ方にみられた工夫は、検証実践1の第8時で行ったパフォーマンス課題の振り返り・吟味で獲得した視点を生かした姿であると推測される。生徒Bの姿からも、ミニパフォーマンスとパフォーマンス課題の取り組みを繰り返していく事が、生徒の思考力・判断力・表現力等を高められると考える。

5 成果と課題

(1) 全体の成果と課題

本実践では、ミニパフォーマンスの「問い」をできる限り、単語や短文で終えることがないように設定した。その結果、多くの生徒が「問い」に対して文章でまとめることができるようになった。また、パフォーマンス課題につながることを意識して、5つの地域の「成長」に焦点を当てた「問い」を設定した。記述内容も、授業で獲得した知識が活用されており、「問い

」を理解して取り組むことができているのではないかと考える。

パフォーマンス課題に関しては、検証実践1とは異なり、多くの生徒がミニパフォーマンスを活用して取り組むことができた。生徒が取り組んだパフォーマンス課題の評価は、A評価5人、B評価2人、C評価4人であった（最後まで到達した生徒は13人）。検証実践1と比較しても、最後まで到達した生徒が半数近くに到達したことは、ミニパフォーマンスとパフォーマンス課題がつながった成果ではないかと考える。また、全体を通して生徒がどのように取り組み、表現するかが分かってきた表れだと捉えている。

課題は、本実践においても設定したパフォーマンス課題に不十分な点があったことである。教師側は、パフォーマンス課題の文言の「強みと課題」という設定が、ミニパフォーマンスの「成長」という言葉をつながられると推測していたが、生徒に伝わりにくい表現になってしまった。生徒の実態に合わせた設定を意識していても、こうした課題が出てくることから、設定したパフォーマンス課題には、用いる語句や課題にリアリティがあるかなど、検討を重ねて設定していかなくてはならないと考えている。

（2）抽出生徒の成果と課題

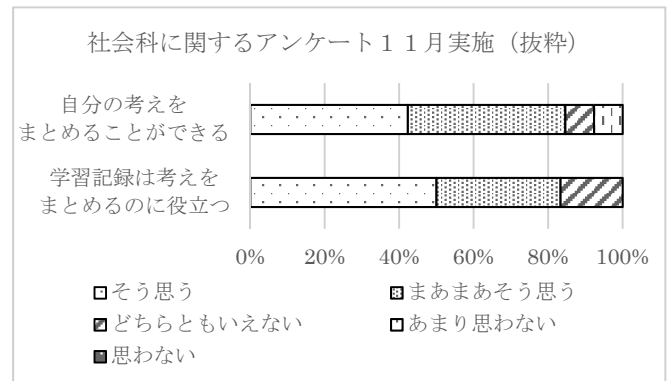
検証実践1と比較して、生徒Aは、パフォーマンス課題に取り組む際に、ミニパフォーマンスを元にして、まとめる内容を自分で選択して記述することができた。また、企業誘致についても、強みと課題についてまとめることができ、設定された課題を時間内に終えることができた。また、ミニパフォーマンスへの取り組みがスムーズになったことや学習のあしあとで振り返ったことを、次時のミニパフォーマンスに生かすことができていた点からも、検証実践1よりも思考力・判断力・表現力等が高まったのではないかと考える。

本実践での生徒Bは、最後まで到達することはできなかったが、パフォーマンス課題では、文章での記述ができていた。そして、ミニパフォーマンスでも文章で記述することができるようになってきていることから、検証実践1と本実践を通して、生徒Bの思考力・判断力・表現力等が高まっていることがうかがえる。課題は、全体の課題に挙げた事柄と同様、用いる語句や課題にリアリティがあるか、検討を重ねて設定していかなくてはならないと考えている。

VII 研究のまとめ

本研究では、中学校社会科地理的分野の2単元において、「逆向き設計」論に基づくパフォーマンス課題を設定した授業実践を行った。その結果、本研究における手立ては、自分の考えをまとめる生徒の育成に有効な手立てとなり得ることが分かった。中でも、「知の構造」を作ることで、単元内で身に付けさせたい知識や技能が明確になる。そして、教師が何を身に付け

させたいかを明確にすることで、「問い」が定まり、ミニパフォーマンスにつながられる。このミニパフォーマンスのつながりを生かしたパフォーマンス課題の設定することで、生徒の思考力・判断力・表現力等の向上にも一定の成果があったといえる（資料16）。



【資料16 検証実践後の結果（抜粋）】

しかし検証実践2では、ミニパフォーマンスでは各地域の「成長」を取り上げていたが、パフォーマンス課題では、「強み」と設定した。生徒は、「強み」という言葉を初めて扱う言葉のように捉えてしまい、取り組む際につまずいていたことが振り返りの段階で明らかになった。そのため、振り返りの時間に、学習してきた「成長」はパフォーマンス課題の「強み」につながっていたことを解説したことで、生徒はパフォーマンス課題とミニパフォーマンスがつながっていたことに気付くことができた。こうしたつまずきは、パフォーマンス課題を繰り返し経験することで解消されると考える。

今後の課題は、教師から提示された課題に取り組むだけでなく、自分たちで問いや課題を立て、解決していくことができるようにするためには、どのような手立てや工夫が必要なのか明らかにすることである。中学校の段階から少しずつ経験を積むことで、高等学校や現実社会の中での課題を解決していく資質・能力につながるのではないかと考える。

VIII 参考文献

- 1) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領 社会科」
- 2) G. ウィンズ/J. マクタイ(2012)『理解をもたらすカリキュラム設計 「逆向き設計」の理論と方法』西岡加名恵訳 日本標準
- 3) 西岡加名恵(2008)『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書
- 4) 宮田佳緒里・奥村好美(2017)「学習課題と評価課題の機能を併わせ持つパフォーマンス課題を組み込んだ単元設計とその効果」『兵庫教育大学研究紀要』第51巻 pp. 109-117
- 5) 上田剛・山口陽弘・石川克博(2017)「知識や技能を活用する力を育む中学校社会科学習指導」『群馬大学教育実践研究』第34号 pp. 141-146
- 6) 岩田睦己・原田信之(2013)「思考力・判断力・表現力にかかわる社会科の学習評価」『岐阜大学教育学部 教師教育研究9』 pp. 55-64
- 7) 原田智仁(2018)『中学校新学習指導要領 社会の授業づくり』明治図書
- 8) 吉水裕也(2018)『本当は地理が苦手な先生のための中学社会 地理的分野の授業デザイン&実践モデル 中学校社会サポートBOOKS』明治図書